



Title	円地文子『菊慈童』論 : ケアの関係と幻想を軸に
Author(s)	齊田, 春菜
Citation	層 : 映像と表現, 18, 95-108
Issue Date	2026-03-09
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.98937
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98937
Type	departmental bulletin paper
File Information	18_06_p95-108.pdf



円地文子『菊慈童』論

はじめに

高齢化社会の進行とともに、ケアは医療・福祉の領域のみならず、倫理・政治・文化など広範な分野においても重要な主題として浮上してきた。文学は、制度化されたケアでは捉えきれない個々の関係性の複雑さや情動の揺らぎを描き出す表現領域として、独自の射程を示してきたといえる。近年、家族制度の変容やジェンダー規範の見直しを背景に、血縁的ケア、すなわち親子・配偶者関係に基づく相互扶養モデルの限界が明確になりつつある。井口高志は「親と同居している長男による扶養と、それに付随した嫁役割である身体介護が自明な役割ではなくな

り、担い手を指定する明確な規範がなくなってきたとされる」と述べている。

こうした状況の中、文学作品は血縁に依らない他者同士のケア関係、すなわち血縁の枠外に広がるケアのあり方に関心を向ける表現の場となりつつある²。本稿が取り上げる円地文子の長編小説『菊慈童』（一九八四年六月、新潮社）³では、古い・孤独・芸能・幻想といった主題に加え、血縁を基盤としない人間関係、すなわち非血縁的ケアの諸相が繊細かつ時に不穏な筆致で描かれる。現代社会において家族が必ずしもケアの確実な担い手ではなくなる中で、『菊慈童』が提示する関係のあり方は、制度的・倫理的な問いを投げかけるものとして再検討に値

——ケアの関係と幻想を軸に

齊田 春菜

する。

ここで、ケアの概念を確認しておきたい。本稿ではケアを広義に捉える立場を採る。広井良典が指摘するように、「……」³「ケア」という言葉は、①狭くは「看護」や「介護」、②中間的なものとして「世話」といった語義があり、③もっとも広くは「配慮」「関心」「気遣い」というきわめて広範な意味をもつ概念である⁴とされる。また、武内佳代も「……」ケアはより広く、子どもの世話（育児）や家族に対する家事労働、病人の看護や介護、障害者の介助、あるいは他者へ向けられる気遣いや配慮にまで用いられる言葉である⁵と述べている。こうした広義のケア概念は、文学におけるケアの表象、とりわけ家族外の関係において描かれるケアを読み解くうえで、有効な理論的枠組みとなる。

さらに本稿では、ジョアン・C・トロントの理論を前提にする。トロントは「……」すべてのケア実践、すなわち、あるニーズへの一つひとつの応答には、権力関係が含まれるからです。「……」ケア提供者は、比較的権力がある立場にいます⁶と述べており、本稿もこの指摘を基礎に据える。ケアは常に肯定的に作用するわけではなく、ケアする／される関係のあいだには必然的に権力が生じる。したがって、本稿が非血縁ケアを問題化するの、血縁外であることを危険視するためではない。

もちろんすべての非血縁関係に当てはまるわけではないが、血縁関係では不可視化されやすいケアの権力性が、非血縁関係においてはより顕在化しやすいという視点を、本稿は分析の基盤として採用する。

こうした前提のもと、本稿は『菊慈童』をケアの観点から読み、血縁の扶養の機能不全や他者間に生まれる情動・依存・負担といったケアの問題に着目する。複数の非血縁的ケア関係（田之内せきと野島豊など）⁷が示すように、これらはいずれも血縁に還元できず、ケアが支えと拘束の両義性を帯びることが分かる。また、円地作品では、女性の語りや老いの主体がしばしばケアの担い手／受け手として表象されてきた⁷。このことを踏まえると、本作の非血縁的ケアの検討は、円地作品におけるケアへの関心の一端を明らかにするうえで重要である。

なお、『菊慈童』に関する先行研究は、物語の構造やジェンダー、老いなどに焦点を当て、その多層的な意味を論じてきた中上健次は物語構造の複雑さと幻想性に着目し、次のように指摘している。

円地文子が試みたのは、人と人の関係の中で派生する感情の力学の一つ、疎む、忌避するという事から、隙間を見つけ出し、そこに人物を配置し三角形をつくる事である。

「…」

物語はこの「菊慈童」においては、三角形の複雑な組み合わせで転回する。遊仙―修二―紫若の疎外の三角形は、香月滋乃―きつ子―娘、田之内せき―野島―娘という構図にあたうる限り近い。三人に、修二、きつ子、野島は、同じようにつきそい、話相手になり、さらに情報の提供者でもある。

中上はさらに、「作の中に創り出した幾つもの三角のおかげで、物語がさながら絵巻物のように先にズラされ変幻していく」⁹と述べ、人物関係の構造的配置が物語の変奏的展開を可能にしている点を指摘する。ジェンダーの観点では、宮内淳子が「…」『菊慈童』の面に象徴されるような、性の曖昧なもの¹⁰に着目し、ジェンダー規範の揺らぎを示すテクストとして読み解く。また、小林富久子は「遊仙という男性主人公に加えて、せきという副次的な女性人物にも光をあてることで、従来の円地文学における女性中心の姿勢を明示しつつ、ジェンダーの越境という新しい境地を表面化させました」¹¹と評価し、従来の女性主体の枠を拡張する試みとして本作を位置づける。

近年では、倉田容子が「ジェンダー／エイジング批評の観点から」¹²作品を再考し、『菊慈童』の意義を「高齢女性が『書く

こと』の意味をその倫理的側面から再提示した点にある」¹³と指摘する。さらに倉田は「…」（自由な）主体」のビジョンには、ステレオタイプなポジティブ・エイジングのイメージや福祉行政の充実のみによつては守りえない、高齢女性の自由と尊厳の所在が示されている」¹⁴と位置づけ、語りの主体性と倫理の実践としての「書くこと」の主題化を強調する。

このように、『菊慈童』をめぐる先行研究は、幻想的な物語構造、ジェンダーの揺らぎ、老いと主体性の問題など、多角的な視点から作品の意義を明らかにしてきた。一方、物語において中心的に描かれる血縁外の人間関係、すなわちケアをめぐる倫理的関係性、とりわけその両義性や潜在的な不穏さについては、十分に検討されてきたとは必ずしも言えない。本稿は、これまでの先行研究の成果を踏まえつつ、『菊慈童』における非血縁的ケアの倫理的想像力に焦点を当て、その新たな読解の可能性を提示する。

一 血縁なきケアとその不穏さ（二）——戦略としてのケア関係

『菊慈童』に描かれるケア関係はいずれも伝統的な血縁的枠組みから逸脱している。本稿が注目する不穏さとは、非血縁ケ

ア固有の欠陥ではなく、ケア一般に内在する情動・責務・利害の多面性がいかに物語化されるかという視点にある。米村みゆき・佐々木亜紀子編『〈介護小説〉の風景——高齢社会と文学（増補版）』¹⁵や佐々木亜紀子・光石亜由美・米村みゆき編『ケアを描く——育児と介護の現代小説』¹⁶の諸論考が示すように、扱われる諸作品では血縁・非血縁を問わず多様なケアが描かれ、必ずしも非血縁ケアが問題含みであるとは限らない。本稿が非血縁ケアを取り上げるのは、血縁ケアと価値的な優劣を論じるためではなく、家族制度という制度的・文化的枠組みの外で行われるケアにおいては、役割や責任の境界が曖昧になりやすく、依存関係が非対称化する傾向があるためである。

本節では田之内せきと野島豊の関係を分析し、続く節では桜内遊仙と泉亭修二、香月滋乃と梅本きつこの関係を取り上げ、非血縁のケアに共通する倫理的曖昧さを考察する。

せきと野島の関係は、せきが家族に追い出されるという出来事を契機に始まる。テクストの冒頭で「八十四歳の老婆が家出した」（五頁）と滋乃の「よしなし草」（九頁）が引用されるかたちで提示される。家出の実態は「転居」（五頁）でありながら、「養女夫婦に家を追い出された」としか言いようがない」（五頁）と説明される。せき自身も「どうして壊れた古道具のように追い出そうとするのだろうか」（三六頁）と述懐し、排除

の感覚が語られる。

この脆弱な状況で、せきは野島と再会する。野島は「島子さんは小母さんが、孫たちといっしょに暮すのはうるさいので、別居したんだといっておいででしたが、帰りに隣りの人にきいたら、それどころじゃない、追出したんだって言っていましたよ」（三八—三九頁）と語る。これに対し、せきは「近所で懇意にした人たちがそんな噂をしているだろうと想像出来たが、親しい筈のない野島にそれを聞かせるには、こっちから鎌をかけて相当立ち入ったことを聞き出したに違いない」（三九頁）と野島に警戒しつつ、「…」一方では、野島のやさしいもの腰や親切な心づかいがうれしく、今夜能会でいっしょにいた人たちとは違った親しさで心に滲んでいた」（四一頁）と複雑な感情を抱く。この場面は、警戒と期待が同時に立ち上がるケア関係の揺らぎを端的に示す。

帰宅後、せきは野島を避けようと決意する。しかし、その夜「歌舞伎の『道成寺』の白拍子といっしょに舞台を動きまわっている」（四一—四二頁）夢を見、白拍子が「どうやら、先刻バスで会った野島に似ているようであった」（四二頁）ことから、起床後には「野島がこの次訪ねて来たら、この夢の話をしやろう」（四二頁）と考えるに至る。そして、せきは「厭な気に食わぬ男だ、…」思いながら夢の中では、結構楽しそう

にいつしよに踊っている。八十四歳になっても、女は女なのかとせきは呆れるような眼で、自分を見まわした」(四二頁)と自己を省みる。この描写は、ケアを求める主体が抱える依存への恐れと、つながりを求める欲望という二重性を示している。

この後、物語の中で両者の直接的な会話は描かれないものの、交流の継続は示唆される。京都旅行で、せきは「あのいつかお話ししましたでしょ。昔うちにいたことのある野島さんが調査のことでちょうどこつちに来ていまして、世話して下さっているんです」(七九頁)と滋乃に語る場面がある。さらに後日、せきの「二、三人の中年の女弟子」(一二二頁)が滋乃ときつ子に「あの人(野島を指す——引用者注)この頃、毎日のように田之内先生のところへ来ているんです」(一二二頁)と伝える場面もあり、両者の関係の持続が確認できる。さらに、能楽堂の建設計画や遺書作成の背後にも野島の影が示唆される(一二五——一二六頁)。野島は日常的支援の一部を担っていたのである。

しかし物語が進むにつれて、せきの急死(一三三頁)や家族間殺人事件(一六六頁)、さらには野島による経済的搾取の疑惑が提示される。せきの養女・島子の証言によれば、野島はせきの遺産を巻き上げ、事件を教唆したとされている(二六八頁——二七〇頁)。ケアと利害が結びつくことは即座に否定的評価

には還元されないが、その結びつきは両者の関係解釈に大きな揺らぎをもたらす。

一方、生前のせきは野島について「思ったよりもずっといい人でしてね。私の境遇に同情している力になって下さるんです。いつか京都で堀内先生が怪我した時も、それは親身に世話をしてくれたんですよ」(二六六頁)と語り、野島も「……私があの人から貰ったものは、芸ではなく女の真髓みたいなものだったんです」(二二五頁)と述べる。これらは両者が単なる利害関係では割り切れない情動の交流を持っていた可能性を示す。だが、第三者からはそれが利得目的の接近とも読まれるため、解釈は一義的には定まらない。

倉田容子は、滋乃がせきの晩年に見いだす欲望と尊厳の痕跡に注目し、「幸福」(一三三頁)の代弁を通じてその生を肯定的に読み直していると指摘する¹⁷。しかし、この読解もテクスト全体から見ると微妙なバランスのうえに成立しており、滋乃のまなざしが尊厳の回復として機能するのか、それとも他者の生を語り直す行為に伴う越境の危うさをも孕むのかは慎重な判断が求められる。

以上のように、せきと野島の関係には、ケア提供／受容という図式では捉え切れない情動と権力の交錯が見られる。野島の行為に利害が含まれていたとしても、せきにとってそれは孤独

の中で他者との結びつきを求める切実な場であった。『菊慈童』は、この両義性そのものを物語化し、血縁・非血縁を超えてケアに固有の倫理的曖昧さを浮かび上がらせている。

こうした非血縁的ケアの多様な形態は、次に検討する遊仙と修二、滋乃ときつ子の関係にも明瞭に表れている。

二 血縁なきケアとその不穏さ (二) —— 師弟関係型ケアと他者的ケア

二組目の能楽師・桜内遊仙と画家・泉亭修二の関係は、単なる師弟関係や一方向的な介護とは異なり、複雑な情動と権力が錯綜するケア関係として描かれている。両者はかつて師弟関係にあり、遊仙は修二の過去について「私は、少女よりも少年の好きな質なので、芸以外にもこれを愛して、厭がるのを無理に……まあ、手籠めにする同様に思いを遂げたこともありました」(一一二頁)と述べており、同性愛的関係の示唆が認められる。この告白からは、かつての関係に性的・権力的支配が介在していたことがうかがえる。

現在では、老いゆく遊仙の身体を修二が支える構図が繰り返して描かれる。たとえば、テクストの終盤、舞台上で倒れかける遊仙にいち早く気づき、着物を汚さぬよう介助する場面では、

「そりや勿論ですよ。遊仙さんの舞を観ていて、お終いの方で彼はもう気がついていたようですからね。着物を汚さないようにすることも、泉亭は桜内さんと同じ位気を使っていたんですよ」(三〇九頁)と語られる。また日常生活では「修二が、大丈夫ですか」といいながら手を持ち添えると(二三二頁)と記され、身体接触を通じた具体的なケアの実践が確認できる。これらは単なる介助にとどまらず、かつての力関係の非対称性を象徴的に反転させる行為としても解釈できる。

一方で、修二のケアは献身的な愛情や恩義だけでは説明できない。彼の内面には、「俺はこの人から完全に離れたのだ。離れたからこそ、現在の俺があるのだ」(二三三頁)という独白があり、このケア行為がむしろ過去の支配からの離脱、すなわち自己の確立を意味していることが示唆される。したがって、修二にとつてのケアは、過去の支配や愛情の負債から自由になる行為であり、情動的清算としての側面も帯びる。遊仙と修二の関係は、ケアを施す／受けるの二項対立には還元できず、情動的応答としてのケア、あるいは逆転された師弟的ケアとして理解されるべきである。

この関係の特徴は、血縁ではなく、かつての情動の残滓によつて結びつけられたケアである点にある。遊仙は妻に先立たれており、娘の存在も示される(五八頁)が、実際にケアを担

うのは修二である。血縁が担うべきケアが非血縁者に移行することで、感情の澱や過去の支配関係の影が立ち上がり、ケア関係には倫理的な曖昧さが生まれる。この構造は、第一節で確認した血縁外ケアの制度的・情動的脆弱性と呼応する。

このように、遊仙と修二の関係は、古い、過去の支配関係、身体接触、情動の往還といった要素が交錯する複雑なケア関係であり、善意による奉仕や搾取に還元されるものではなく、情動的負債を清算する過程としてのケアのあり方を示す。

三組目の香月滋乃と秘書・梅本きつ子の関係もまた、血縁では説明できないケアの形態を示す。形式上は「秘書」(二〇頁)であるきつ子の役割は、雇用関係を超えて滋乃の日常的な身体的・精神的ケアにまで及ぶ。たとえば、滋乃が発作を起こした際、「娘の登美子は」「母親が外で倒れたなどと聞いても」「厭な顔をして、「また大袈裟なんでしょう」とつき添って来たきつ子を叱るようにいった」(一六三頁)とあり、娘は母に冷淡である。一方きつ子は「滋乃の手をとって脈に触ってい」(二六〇頁)たり、水を渡して休ませたうえで娘のいる家へ送り届けたりするなど、即応的な行動を取る。これらは専門的知識に基づく介助であると同時に、情動的関与を伴うケアとして機能する。また、「きつ子は甲斐々々しく、寝巻きに着かえさせたり電気毛布をかけたたり、滋乃の寝心地のよいように処置し

てから、持葉の心臓の薬を飲ませ」(一六四頁)とあるように、看護的行為も自然に引き受けている。

ただし、両者の関係が依存関係に傾くことはない。きつ子は滋乃の脆弱さに寄り添いつつ、「こんな家庭が崩壊しなければ嘘だと、きつ子は思っている」(一六五頁)と滋乃の家庭について冷静に分析する。滋乃もケアを全面的に委ねず、「先生、また眩暈がするんですか?」と言いながら、きつ子が片手で滋乃の手を握って、片手を彼女の額においた。「どうもしているんじゃないのよ。ただ、眠りたいだけなの。もう少しこのままにしておいてよ」(三二〇頁)と距離を保つ。この関係には雇用と情動、看護と観察のあいだの独特の緊張が存在する。

さらに、きつ子は滋乃の娘・登美子を批判しつつも、「そりゃ先生だって我がままな人じゃあるけれど、私たちとの付合いで、辛抱出来ないほどのことはないのに」(一六四頁)と述べ、滋乃の「我がまま」を認めつつも、それを受け止め可能な範囲のものとして扱う。これは情動的盲目的奉仕ではなく、判断と距離感に基づく実務的ケア観を示す。血縁から自由であるため、安定性と冷静さが確保される一方、滋乃との関係には静かな緊張と牽制が漂う。

以上の三組に共通するのは、ケアが血縁関係に基づかないにもかかわらず、強い感情の投影や力関係の操作が介在する点で

ある。『菊慈童』におけるケアは、無償の献身や愛による理想的支え合いとは異なり、常に不完全でありながら、搾取や支配の可能性を含む。円地文子はこの不確かさを否定的に描くのではなく、その不安定性を見据えることで、なお他者とながらうとする語りの必要性を提示している。

三 次元の違う世界——ケアと幻想

『菊慈童』において、香月滋乃が語る「次元の違った世界」（一四六頁）は、老いとケアという現実的問題を幻想的に超越する内的空間として描かれる。滋乃は「よしなし草」と題したノートに思考や文章を綴る中で繰り返しこの世界を表現する。「現実をもう一つ自分のうちで鋳溶かして、別のものにしてやる」という山気というか、芝居気というか次元の違う欲求があった」（九頁）という記述は、書くことや空想を通して、現実の被ケア者としての自分を超越する営為を示唆する。

この「次元の違った世界」が最も象徴的に現れるのは、「菊慈童の面」に関する描写である。倉田容子は、この幻想世界の構成要素を「菊慈童の面」および「桜内遊仙の血筋」という二つの系譜に整理している¹⁸が、ここではまず前者に焦点を当てる。能の演目『菊慈童』は、皇帝の寵愛を受けた童子が失寵し、

山中で菊の露を飲み不老長寿を得るという物語であるが、本作ではその慈童の姿が、老いてケアを受ける田之内せき、桜内遊仙、滋乃自身に重ねられる。たとえば、「黄色い小菊の盛上りの中に田之内せきは白い髪のまま、童女のように素直な美しい顔で立っていた。『…』どうやら滋乃自身の顔でもあるように見える」（二二頁）では、せきだけでなく滋乃自身も永遠の童子＝菊慈童として認識され、現実におけるケアの必要が幻想の中で消失する様子が描かれる。

さらに、「菊慈童の面」が「猿橋正蔵の顔になり、桜内遊仙の顔になって、いつの間にか、直ぐ近くで錆びた低い声で話している泉亭修二の顔に変わっていた」（一六二頁）と描かれる場面では、面の変化を通して複数の人物が象徴的に一体化する。面そのものが物語上の出来事を引き起こすわけではないが、匿名性と可変性によって登場人物間の境界や心理的距離の曖昧化を表現し、老いやケアに関する現実的制約を超えた幻想的空間を成立させる。多重的でありながら一体化する「菊慈童の面」は、被ケア者が幻想の次元で自律的かつ孤高な存在へ昇華する象徴として機能する。

また、現実では滋乃が「誰かに手でも引いて貰わなければ、とても登って行ける道ではない」（二六頁）と感じる道も、「次元の違った世界」では「足取りは軽い」（二六頁）と描かれる。

幻想世界では、ケアはもはや必要とされず、老いと身体的衰え、他者への依存から解放された救済的空間が出現する。「菊慈童の面」は、現実の依存や不安を幻想的自立像に変換するメタファーとして機能し、ケアを必要としない自立性の象徴となる。

一方で、「次元の違った世界」は「桜内遊仙の血筋をめぐる物語」としても展開される。たとえば、「あの二郎という石工の顔が、昼に逢った桜内遊仙の顔に似ている」(一〇五頁)や、「滋乃はひとりごとを言つて内へ入ったが、あの見なかった絵にまつわる思いは滋乃の内につか、稚児草子に変わって、遊仙に似た逞しい僧が、修二の少年時代を思わせる美童をうしろから抱きすくめて、無体に犯そうとしている光景」(一三二頁)といった描写は、幻想が単なる回想や夢想にとどまらず、過去の師弟関係、階級制、ジェンダー、性愛といった複雑な要素が交錯する舞台として構成されていることを示す。

倉田が指摘するように、この幻想の語りは「文学的言説」¹⁹の生成と密接に関わっており、滋乃が現実の断片から物語を紡ぐ主体である点を示している²⁰。倉田の読解は、滋乃の語りを「文学的言説」の生成として肯定的に評価しているのに対し、本稿では、その語りが現実のケア関係に回収されず、むしろ他者との緊張や距離を内包する点に注目する。

重要なのは、この幻想が閉じた内面世界にとどまらず、他者

との関係性の中で再び開かれていく点である。実際、滋乃が書いた「自分の頭の中にぐもっている泉亭修二や桜内遊仙や、大野寺の磨崖仏を彫った石工などの変形したもの」(二〇三頁)すなわち「擬古物語」(二〇〇頁)は、現実には彼女をケアするきつ子によって読まれる構図を通じて、その開かれた性質が示される。きつ子は、由比珠江との会話の中で、滋乃の書齋で見つけたノートを「いつか、香月滋乃の書齋で大小入り混った妖しげな字で書かれていたノートをきつ子は思い出していた」(二二九頁)と回想する。「そこには珍しく頼まれ原稿ではなく、滋乃が自分で書いたらしい古物語が記されていた」(二二九頁)と叙述されている。ここで、きつ子は幻想世界を部分的に覗く読者としての位置を占める。

このように、「次元の違った世界」は滋乃の内的幻想であると同時に、きつ子というケア提供者＝読者を媒介として外部に開かれる語りの場でもある。滋乃が幻想を記し、きつ子がそれを読むという関係を通じて、血縁や感情に依拠しない新たなケアの関係性が一時的に生成される。そこに成立するのは、信頼に基づく共感ではなく、むしろ距離を保持した協働、あるいは非対称的共生と呼ぶべき関係である。

さらに、幻想的語りは現実で断絶した関係や時間を物語の内部で一時的に再結合させる機能を持つ。稚児草子や擬古物語に

仮託された遊仙や修二の像は、滋乃にとって失われた過去や断絶した人間関係を再構築する装置として作用する。また、菊慈童のように老いを超越しケアを不要とする存在への変容は、現実の不安や疎外に対する心理的応答として理解できる。

以上のように、「次元の違った世界」は単なる逃避的幻想ではなく、現実のケア関係を反映しつつ、他者とのあいだに新たな倫理的関係性を構想する場として機能する。『菊慈童』における幻想は、ケアの倫理的想像力そのものを具現化した表現として理解できる。

四 菊慈童イメージとケア

滋乃による幻想的な描写を、語りの分析の観点から検討したい。ここでの語りとは、現実の不在や断絶を、象徴や物語の形式を通して一時的に補完・編成し直す内的プロセスである。登場人物の関係性や時間感覚は、物語の語り手が選択する視点・順序・象徴表現によって構築され、語りの形式自体がケア関係の再編に作用していく。

この語りの機能が最も顕著に現れるのは、物語末尾の幻想場面である。以下は、テクストを論じるうえで重要な記述であるため、少し長めの引用とする。

薄曇った視界に白い点が並び、その点は見ると間に拮がつて童子の面になった。半ば開きかけた唇と瞳のない切れ長の眼の面をかけているのが、桜内遊仙のようでもあり滋乃自身のようでもあった。〔…〕

いつかそれは、自分そのものようになって、やがて橋懸で足拍子を軽く踏むと、そのとたん、面が二つに割れて、中にあるのは田之内せきの老いた顔であった。〔…〕

〔…〕せきはとうに亡くなっているのにと考えた時、慈童もせきも消えて、現在の自分らしい老女が瘦せた猫を抱いて、小さくかがみこんでいるのが見えた。〔…〕乞食婆さんが野良猫を抱いているのかと、滋乃はそれが自分の本当の姿であることを知ったように思った。能の囃しの声がどこからか聞こえてくるようであった。田之内せきも桜内遊仙も自分もみな同じように、慈童とは較べものにならない短い寿命を生きつづけてきたのだと、滋乃は人間の現実の世界と八百年を一時間近い時間で生きる能の舞台とが、結局は同じものであることを悟ったように思った。(三二〇—三二二頁)

この場面において特徴的なのは、三人称で語られる地の文が幻想場面では滋乃の内面に強く焦点化し、語り手の視点が現実描写から内的世界へと連続的に移行していく点である。この焦点化の転換が、人物像や時間の境界を切れ目なく接続し、複数の存在が一つの連続した像として現れる叙述の構造を可能にしている。

さらに、語り手の視点選択と象徴表現によって、断絶していた複数のケア関係が内的に重ね合わされ、象徴的に統合されていく。たとえば、童子の面が遊仙や滋乃自身、さらにせきへと次々に変化する描写は、ケア関係の立場の交錯や境界の揺らぎを示すと同時に、語りの中で関係性が再構築される過程を可視化する。

また、「八百年を一時間で生きる能の舞台」と「現実世界」の時間が同時に経験される描写は、語りの形式によって時間感覚が相対化されることを示唆する。語りの順序や象徴表現が、現実と幻想の時間を重ね合わせ、断絶や不在を抱え込んだまま関係性を再編する装置として機能しているといえよう。

したがって、この幻想は、ケアが成立し得ない現実を回避するのではなく、その不全性を語りの形式で引き受け、応答しようとする試みとして理解できる。幻想は、情愛や信頼だけでは支えきれない複雑なケア関係を象徴的に包摂し、その裂け目を

語りによって一時的につなぐ倫理の実践として解釈できる。

以上の点を踏まえると、滋乃の幻想は、ケア関係に内在する断絶や不完全さを再帰的に照射する語りの装置として機能している。円地文子『菊慈童』は、単なる慰撫や理想郷の提示にとどまらず、老い・孤独・断絶といった現実の困難に対して、文学という形を通して応答しようとする試みと位置づけられる。

おわりに

本稿では、円地文子『菊慈童』に描かれる血縁なきケアの諸相を分析し、制度的ケアモデルや家族的相互扶養の枠組みでは捉えきれない、倫理的揺らぎを孕むケア関係の複雑さを明らかにした。登場人物たちの関係、とりわけ老いを抱える者とならない者のあいだに交錯するまなざしや距離、さらには現実と幻想を往還する語りの働きは、血縁や制度に依存せず成立しながらも、依存・搾取・共感・沈黙といった多層的な情動の応答を内包している。さらに、語り手と滋乃という二者による『菊慈童』から派生した語り直しのイメージは、応答なき関係性を象徴的に再構成し、ケアの不可能性に対してなお応答しようとする営みとして位置づけられる。

以上の検討を踏まえると、『菊慈童』は、老い・孤独・死と

いった存在論的な問題とともに、他者との関係性という倫理的
主題を幻想的語りの形式を通じて探究する作品として理解でき
る。非血縁的ケアに内在する権力性や両義性が可視化される一
方、そこには曖昧さや危うさが描き出されつつも、なお他者に
応答しようとする語りの力が示され、文学的想像力によってケ
アの倫理を照射し得る可能性が開かれる。

今後は、他の円地作品や同時代文学との比較を通じて、ケア
の倫理と文学の表現との関係をさらに検討する余地が残されて
いる。

1 井口高志「支援・ケアの社会学と家族研究」(『家族社会学研究』第
二二巻第二号、二〇一〇年一〇月、一六七頁。

2 たとえば、小川公代の『ケアの倫理とエンパワメント』は、「この序
章では、筆者がケアの倫理論と出会うまでの経緯と、文学作品のな
かに描かれる〈ケア〉こそが、他者を阻害し、犠牲にしてまでも
『自立した個』の重要性を掲げる近現代社会が軽視してきた価値では
ないかという問いを提示した。強さと弱さ、理性と共感、あるいは
自立型の自己と依存型の自己のあいだに、いまだ言語化されない不
可視のものを見出すことはできないだろうか」(小川公代「序章 文
学における〈ケア〉」『ケアの倫理とエンパワメント』二〇二一年八
月、講談社、二七頁)という問いを立て、文学作品を〈ケア〉の観

点から読み解いている。こうした試みは、ケアの倫理を血縁や制度
の枠に限定せず、他者との関係性のあり方そのものを問い直す営み
といえるだろう。

3 初出は、一九八二年一月から一九八三年二月にかけて『新潮』に
掲載された。

4 広井良典「プロローグ——ケアとは何だろうか」(『ケアを問いなお
す——〈深層の時間〉と高齢化社会』一九九七年二月、筑摩書房、
一〇頁。

5 武内佳代「第2部 項目篇 11 ケア」(飯田祐子・小平麻衣子編
『ジェンダー×小説ガイドブック 日本近現代文学の読み方』二〇二
三年五月、ひつじ書房、一四八頁。

6 ジョアン・C・トロント「第1章 ケアするのは誰か?——いかに、
民主主義を再編するか」(『ケアするのは誰か?——新しい民主主義
のかたちへ』岡野八代訳・著、二〇二〇年一〇月、白澤社発行、現
代書館発売) 三三頁。

7 たとえば、語り手の「私」が「病気で原稿を自筆することの出来そ
うもない旧師の布川先生のために口述筆記の役をひき受けている」
(三三〇頁)という設定の「二世の縁 拾遺」(初出『文学界』一九
五七年一月)、また語り手である老女の「私」が、息子に「居候」
(三四八頁)だと言われた老女・木原志乃の自殺と、彼女が生前に描
き残した画帳「猫の草子」を巡る物語を関係者から聞くという物語

の構造をとる「猫の草子」（初出『群像』一九七四年八月）などがある。これらの作品では、ケアする／される女性たちが描かれている。

8 中上健次「物語の系譜 円地文子」（『風景の向こうへ・物語の系譜 現代日本のエッセイ』二〇〇四年二月、講談社、三〇九―三二〇頁）。

9 中上健次「物語の系譜 円地文子」前掲書、三二二頁。

10 宮内淳子「円地文子『菊慈童』論——中性的な存在の意味するもの——」（『人間文化研究年報』第九巻、一九八六年三月、二七頁）。

11 小林富久子「第一章「老大家」の時代」（『円地文子 ジェンダーで読む作家の生と作品』二〇〇五年一月、新典社、二五八頁）。

12 倉田容子「Ⅲ 語る老女——円地文子論 第四章〈書くこと〉の倫理——『菊慈童』（『語る老女 語られる老女——日本近現代文学にみる女の老い』二〇一〇年二月、学芸書林、三一六頁）。

13 注12と同じ。

14 注12と同じ。

15 二〇一五年五月、森話社。

16 二〇一九年三月、七月社。

17 倉田容子は、「繰り返すが、滋乃はせきと野島の間を肯定的に見ていたわけではない。せきの一周忌の日、滋乃は、せきの死後にその孫が父親殺害事件を起したかと思ひ合わせ、「せきはいいい時に死んだ」（十七、231頁）とさえ思う。しかし滋乃は、せきを哀れむのでは

なく、幸いにも彼女から奪い去られることなく最晩年に花開いた欲望の痕跡を「老いたままに美しく明るい顔」のなかに見出すことで、その生涯を悼む。野島のような男に付け入られた晩年の孤独や、「武士の家の血筋だと教えられて、親にも夫にも、仮そめにも逆らうことはせず、一生懸命に仕えて来た」（三、30頁）という家父長制的抑圧下にあったライフコースに同情するのではなく、せき自身の声では語られることのなかった「幸福」を代弁することで、その尊厳を尊重するのである」と述べている（倉田容子「Ⅲ 語る老女——円地文子論 第四章〈書くこと〉の倫理——『菊慈童』」前掲書、三二五頁）。

18 倉田容子は、「次元の違う世界」とは滋乃の妄想とも夢ともつかない仮想の世界のことであり、しばしば白昼夢のように唐突に「現実」世界に侵入する。この世界は、菊慈童の面に関するものと、桜内遊仙の血筋をめぐるものとに分けられる」と整理している（倉田容子「Ⅲ 語る老女——円地文子論 第四章〈書くこと〉の倫理——『菊慈童』」前掲書、三二五頁）。

19 倉田容子「Ⅲ 語る老女——円地文子論 第四章〈書くこと〉の倫理——『菊慈童』」前掲書、三二二頁。

20 倉田容子は、「しかしこのファンタジーは単に後退的なものではなく、第十三章の擬古物語のように滋乃の生きる糧であるところの文学的言説を生み出したり、「私にだってまだ、生きている贅沢さはあるの

だ」と滋乃自身にその欲望を送り返したりするなど、「現実」における滋乃の自由と尊厳を保証する「根源的な想像力」としても表出している」と述べている（倉田容子「Ⅲ 語る老女——円地文子論第四章〈書くこと〉の倫理——『菊慈童』」前掲書、三二一—三二二頁）。

※本稿における円地文子『菊慈童』の引用は、『菊慈童』（一九八七年四月、新潮社）に拠る。なお、全集に収録されている他の円地の作品は、『円地文子全集』（全一六巻、一九七七年九月—一九七八年十二月、新潮社）に拠る。また、一部を除くルビは省略し、引用を省略する場合は「…」を使用した。